誰かが誰かを救う陳腐な物語

いとうこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰かが誰かを救う陳腐な物語

【Ｎコード】
Ｎ８３２１Ｕ

【作者名】
いとうこう

【あらすじ】
主人公・幸弘はある日、高校時代の友人・哲郎から女子中学生をナンパしようと誘われる。心の底から彼女が欲しかった幸弘は悩んだ挙句、哲郎と一緒にナンパをすることにする。だが、ある集団とのすれ違いで思いもしない方向に物語が動く。

作戦会議

深夜のスーパーのバイトを終え、携帯を開くと哲郎から一通のメールが届いていた。『バイトが終わったら電話をくれ』絵文字も顔文字もない、シンプルで愛想のないメールだった。幸弘はその指示に従い、電話をした。すると、哲郎は「けやだい公園に来てくれ。重大な発表がある」と高揚した声で言った。幸弘は仕方なくバイト先のスーパーから原付でけやだい公園に向かうと哲郎は木の上に登って待っていた。

「よぉ、来たな。待っていたぞ。」ニキビの付いた顔で木の上から幸弘を見下して哲郎が言った。

「なんだよ。重大な発表って。」幸弘は原付のエンジンを切ってヘルメットを脱ぐ。二人がいつも集まる場所はこの『けやだい公園』だった。哲郎の家からは自転車で十分ほどの距離にあり、幸弘の家からは原付で十五分程の距離である。哲郎は高校からの友達であり、同じ部活の仲間だった。だが、クラスは同じになったこともなく、趣味やゲーム、好きな音楽などの好みは全然合わなかった。幸弘の好きな野球を哲郎はルールすら曖昧であるし、哲郎の好きな芸人のギャグは幸弘には理解不能だった。おまけに、好きな女性のタイプも違う。幸弘が好きな女優を語れば、哲郎は首を傾げ、哲郎が語れば、幸弘が美化し過ぎだと一刀両断に切り捨てる。二人が唯一分かり合えることといえば、微乳派より断然巨乳派ということだった。

しかし、どういうわけか不思議と馬が合った。友達が少ないということもあるが、二人は高校を卒業してからもよく遊ぶ仲であった。

「いい作戦が思いついたんだよ。」木から飛び降り、高校生の頃と変わらず顔で得意げな顔になっていた。

「ふーん。どうせくだらないことだろ。」幸弘達は高校を卒業してからくだらないことをやり続けて気が付いたら十一月になっていた。

趣味を作ろうと釣りやスケボーなどを買い、自分らに合わないと気付いて辞めて、何か思い出を作りたいと自転車を漕ぎ続けて、隣の県まで行って、迷子になって交番に帰り道を尋ね、おまけに足を攣る、とくだらないことをやっていた。いわゆる、友達もあまりいなくて、何に青春を費やしていいのかわからなかったのだ。そして、最近の二人の口癖は『クリスマスまでには彼女がほしい』であった。それを心の中で懇願した数はもう数えきれなかった。

「くだらないことなんかじゃない、彼女を作るいい方法が思いついたんだよ。」哲郎が指を鳴らして反論する。

「あっそう。じゃあ、聞くだけ聞いてやるよ。」幸弘はどうせくだらないことだと思いつつも、藁にでもすがる気持ちなので、少しだけ期待をしてしまう。しかし、哲郎の提案はとんでもないものだった。

「ナンパだ。」哲郎は煙草のヤニで黄ばんだ歯を見せて言う。

幸弘はそれを聞き、すぐに「無理だ」と首を横に振る。だが、哲郎はそれを予想していたように「まぁ、普通じゃ無理だよな。」と自信に満ち溢れた表情で言った。

「ああ、おれ達じゃ相手にされない。笑って馬鹿にされる。きっと、おれ達がナンパしたところで『わたしキモ男からナンパされたんだ』ってその嫌みな女のステータスを上げる敗残兵となるだけだよ。」幸弘と哲郎は身長も百七十に満たない上に、顔も決して恵まれているとはいえなかった。また、女と気楽に会話を楽しめるほど、女に免疫があるわけでもないし、人付き合いは上手ではない。さらにいえば二人とも人見知りであった。

「でも、中学生相手ならどうだ？」

「中学生？」幸弘は眉を顰めて聞き返す。

「ああ、おれだって馬鹿じゃない。」哲郎はいつになく真剣な顔で言った。「東京まで行くわけじゃないし、この辺にいる可愛い女をナンパするわけじゃない。ターゲットを中学生の女の子にするんだ。」

「・・・お前正気か？」幸弘は高校生からの友人をまじまじと見る。しかし、哲郎は「何か問題でもあるか？」と呑気なことを言った。
「問題も何もそれって・・・犯罪にならないか？」大学生が中学生に手を出すのは犯罪のレベルであると幸弘は思った。法律で裁かれなくても道徳的に問題があるだろう。
「別に犯罪ではないだろ。それに、おれの親だってオヤジとおふくろは十離れているし。」哲郎は平然な顔で言う。
「でも、それは出会い方の問題だろ。」
「出会い方ってなんだよ。別に中学生だっておれらと最低で四つしか変わらないぞ。おれの両親は十だぞ。」哲郎は手を四にして言った。
「でも、そうゆうのは質の問題みたいなものだろ。綿飴十グラム多いのとステーキ十グラム多いのじゃ全然違う。」
「ステーキと綿飴？」
「ステーキが隣のテーブルの方が多かったら、隣の方が少し多そうだな、と思うだけだろ。でも、綿飴は十グラムだけでもあからさまに見た目が違う。店員を呼びだして訴えても良いレベルの違いだ。」
「まだ、中学生は綿飴のように軽いと言いたいのか？」
「ああ、年齢がな。」
「でも、お前の好きなこの間結婚した女優は相手と十四歳から付き合っていたってニュースでやっていたぞ。確か相手とは五つ違う。だから大丈夫だ。」
「本当か？」幸弘は心底驚く。「そうすると、十九歳と十四歳か？」丁度、中学生と大学生と同じ年齢だと計算する。そこに関しては本心からの驚きだった。
「ああ、だから大丈夫だ。」哲郎はやたら『大丈夫』という言葉を念入りに押してくる。
「う～ん。でも、中学生ってのはなぁ～」幸弘は自分のお気に入りの女優が十四から十九歳の彼氏がいた、という前例があってもイエスとは言えなかった。そもそも、芸能界と一般の世界では外国と同

じぐらい文化が違う気がした。それに、自分にはロリコンという性癖はないと思っている。どちらかと言えば自分が付き合うのは年上だと思っていた。しかし、ナンパというものもやってはみたい気持ちもあった。

「大丈夫だ。犯罪ではない。」哲郎が強い瞳で主張をする。

「そこまでいうなら、考えるけど、中学生を甘く見過ぎてないか。いくら、中学生でもおれ達ぐらいのレベルでは相手にされないと思うし、数打てば当るっていう考えも甘いんじゃないか。」

「・・・どうゆう意味だ？」今度は哲郎がまじまじと幸弘を見た。

「例えば服装だ。最近の女の子小学生ですらお洒落が好きらしいし、おれ達みたいなダサい格好した男に魅力を感じないんじゃないのか？」二人とも決してお洒落とはいえなかった。幸弘は一応考えて服を購入しているが、お洒落とは程遠いし、哲郎に至ってはいつもジャージで済ましている。

幸弘が疑問を口にすると哲郎は考え込むように黙り込んだ。そして、ゆっくりと「おれ達にはナンパが無理だというのか」と残念そうに嘆いた。

「違う。そうじゃなくて、もっと計画してやる必要があるんじゃないかと思ったんだ。」

「計画って具体的にどうするんだよ？」哲郎が口を尖らせる。

「そうだな。まずは、お洒落な服を買った方がいいと思う。それで、どうナンパするか・・・シミュレーションとか？　・・・そうゆうのが必要なんじゃないか？」幸弘は適当に思い付きで言う。

「そうか・・・計画性か・・・それも一理あるな。」哲郎は必要以上に頷く。

「でも・・・失敗したら・・・おれ達は変質者だ。」幸弘は真顔で言った。

「それはないだろう。」すぐに哲郎は笑って冗談にしようとする。

「それは大袈裟だよ」と。

「馬鹿。まだ、中学生だぞ。親だって敏感な時期だし、子供なのか

大人なのか判断しづらい時期だ。」
「そうか～？」哲郎は首を捻る。
「そうだよ。この発想すら犯罪かもしれないぞ。」
「それはないだろ。」哲郎は少しむきなって言い返す。
「でも、相手は子供だっていう奴だっている。義務教育中だぞ。」
「でも、お前だって賛成したじゃないか。」
「ああ、だから、おれは相手を必ずしも中学生でなくてもいいんじゃないかと思う。」
「普通の女をナンパするのかよ。」哲郎は鼻で笑い飛ばし「そっちの方が現実的ではない」と言った。お前は普通の女を何だと思ってんだと聞いてみたくもなる。だが、哲郎の言うことも理解できないわけでもないので「例えばだよ」と誤魔化す。
「例えばってどうゆう意味だよ？」哲郎がすかさず聞き返してくる。
「例えば・・・中学生が予想以上に幼かったり・・・自分が犯罪をしている気分に苛まれたりした場合は・・・方向性を変えて普通の女性をナンパするのも悪くないんじゃないかと思っただけだよ。」
幸弘はしどろもどろに言う。自分で言ってからナンパをするというのが恥ずかしくなってきた。
「う～ん。そうだなぁ。わかった。でも、まずは中学生を様子みてからな。」哲郎は念入りに中学生を押す。
「わかった。でも・・・・哲郎ってロリコンなのか？」そこは聞いておかなければならないような気がした。もし、こいつがロリコンなら計画は中止だ。
「別にちげーよ。ただ、中学生ならおれ達でもいけるんじゃないかと思っただけだ。」
「それだけの理由か？」
「ああ、そうだ。」哲郎は堂々と答える。潔いのか根が腐っているのか、狡賢い判断すべきなのかわからず「ああ、なるほどね。」と悩みながら幸弘は必要以上に頷いた。

準備

幸弘達は計画を立て、まずは近くのショッピングセンターに服を買いに行くことに決めた。幸弘達は服屋を歩き回り、チャラそうな服は避けて、紳士的な服を買った。

幸弘は適当に店員が薦められるままに買い、服の着方や合わせ方などを教えてもらった。哲郎は一着二万もするコートを買っていた。

「ずいぶん高い店だったな。原価いくらなんだよ。」幸弘はなんだか少し損した気分になった。お洒落の初心者だからといって店員の思うつぼに買わされた感は否めなかった。

「いいじゃんか。これで準備は整ったな。」哲郎は満足そうに言う。

「完璧だ。」と。その満足そうな言い方にはこの服さえあれば、ナンパが成功するのは間違いがない、という過信があるように聞こえた。その自信が幸弘を少し心配にさせる。

「服があるからってナンパが絶対に成功するわけじゃないからな。」幸弘は念の為に言う。

「大丈夫だよ。店員さんだって、おれが試着した服で息を呑むぐらいに驚いていたぜ。」哲郎は相変わらずの自信を見せる。

確かにあの店員は驚いていた。だが、あれは完全な演技だ。哲郎のような勘違い男をその気にさせる演技だ。『お兄さん格好良いですよ。』と若い女に言われたらすぐにその気になりやすい哲郎はその気になる。

「二秒だよ。第一印象は出会って二秒で決まるんだ。」哲郎は何故か自慢げに言う。

これは店員の言葉だ。さすがに一着二万という大金に躊躇していた哲郎に店員がこの言葉を哲郎に言い放ち、哲郎は目から鱗を落としたような表情で「これ買います。」と店員に言った。

幸弘は大学に通いながらバイトをやっていて、一ヶ月のバイト代は約七，八万円だ。三万の出費はかなり思い切った買い物だった。し

かし、哲郎は大学もバイトもやっていない。いわゆるニートだった。大学受験に失敗し、予備校に通うか悩んだ末に出した答えが、一年間何も考えずに遊ぶというものだった。バイトぐらいはした方がいいんじゃないか、と何度か諭したがバイトもしないで遊ぶのに意味があるという哲郎の言い分だった。しかし、どこにそんな金があるのだろうと幸弘は時々不思議に思う。

「少し、近くの中学校を見に行こうぜ。」哲郎が嬉しそうに言う。

「ああ、でも二人の出身校は避けた方がいいな。」幸弘と哲郎は別の中学だった。

「なら、この近くの中学でいいんじゃないか？」このショッピングセンターの近くに中学校があった。その中学は二人の出身の中学校ではなかった。

「そうだな。・・・でも怪しまれないか？」幸弘は用もないのに中学校をじろじろ見るのは不審者扱いされないか、心配する。出身校でもないのに何の用もなく中学校の近くを歩きまわるのはかなり怪しい人物として見なされるのではないだろうか。

「大丈夫だよ。お前は心配しすぎなんだよ。それに今日は日曜日だし、誰もいないだろ。」幸弘の心配など吹き飛ばす様に哲郎が明るい声で言った。しかし、逆に哲郎は考えが浅はか過ぎるのではないかと懸念を抱く。こいつに流されては駄目だ、おれがしっかりしないと、と。

近くにあった公園に自転車を止めて中学の周りを歩いてみた。校門の前を通り過ぎようとした時、部活を終えた男の子が出てきた。しかし、それは男の子というよりはもう男であった。幸弘より大きいし、肩幅もある。

「なぁ、いまのは中学生だよな。」確かめるように哲郎に訊ねる。

「まぁ、ジャージも着ていたし、なにより中学校の校門から出て来

たんだから間違いないだろ。」
「そうだよな。」幸弘は自分が思っていたより中学生は大人だったことに驚いていた。
「お前が思っているより中学生は大人なんだよ。」哲郎は嬉しそうに言う。
「そうなのかなぁ～」と幸弘が納得しそうになっていたら、校門からまた中学生が出てきた。今度は、身長は低く、男なのか女か瞬時では判断し兼ねた。近づいてみてやっと女の子だと判断できるぐらいの女の子であった。
「今のも中学生だよな。」幸弘はわざと確かめる。
「まぁ、成長期だ。いろんな子がいるよ。相手を選んでナンパしよう。」哲郎はさほど気にする様子もなく、あっけらかんと言った。
幸弘はやはりこの作戦には無理があるのではないのだろうかという不安、隣にいる友人に対しての不信感、でもナンパをしてみたい気持ちが綯い交ぜになり、最終的には三万円を後悔した。

視察

幸弘は週六で大学だったので、次の作戦は幸弘が午前中に講義が終わる水曜日になった。大学が終わり哲郎に電話すると、中学の前まで来てくれと言われ原付に乗って行くと哲郎がコインランドリーの前にいた。コインランドリーの前にはベンチがあり、その正面には校門があるのでこの位置は中学生の下校を見学するにはベストの位置だった。

「中学生の下校時間って四時ぐらいだよな。」幸弘は自販機でホットコーヒーを買いながら訊ねる。

「ああ、そうだ。」哲郎は一昨日と昨日研究済みなので知っていた。この熱い気持ちをもっと別の物に使えないものなのかと思う。現在の時間は三時なので、下校時間まではあと一時間あった。

「なぁ、まだ、時間あるしバッティングセンターで時間潰さないか？」十一月の外は寒い。座っているだけでは余計に寒い。自販機で買ったホットコーヒーはたいした効力は得られず焼け石に水という状態だった。

「駄目だ。集中しろ。この寒さは計画を立てる為の試練だと考えろ。この寒さはおれ達を試す為のものだ。」哲郎はおそらくゲームのキャラクターのモノマネなのか、洋画のモノマネなのか幸弘にはわからないが、モノマネ口調で言った。誰がおれ達を試しているんだと、言い返したくもなったが、本気で返すのも馬鹿馬鹿しいので「あっそう」と流した。

すると「あれ」と哲郎が何かに反応した。「どうした、神様からお告げでもらえたのか？」幸弘は適当に冗談を言う。

「いや、あの車・・・一昨日も止まっていたんだよな」哲郎が一台のワゴン車を指差して言った。

「ふーん。気のせいだろ。きっと似たような車だよ。」

「違う。色もナンバーも似ているような気がする。いや、絶対同じ

車だ。」哲郎が何を興奮しているのかわからないが高揚した声で言った。
「まぁ、でも気のせいじゃないのか？」
「違う。あいつらも、きっと、中学生をナンパしようとしてんだ。」哲郎は何を根拠に言っているのかわからないが、鼻息を荒くさせて言う。
「ふーん。おれら意外にこんな馬鹿な行動するやつがいるとは思えないけど・・・」幸弘はこの行動は自分でも馬鹿だと認識はある。
「幸弘・・・馬鹿な行動だと思ってんの？」哲郎は目を丸くして言う。
「常識とか道徳的とか、そうゆう考えからは少なくても外れているとは思ってる。」
「常識なんて関係ないだろ。そんなの偉ぶっている人間が作ったもんだ。おれ達にはおれ達のルールがある。」
「でも、おれ達は社会の中で生きているだろ。そうしたら、社会のルールで生きなくちゃ駄目じゃないか。」
「おれはまだニートだ。社会は関係ない。それに常識とか道徳っていうのはその人間の主観で判断するものだろ。おれの道徳には中学生をナンパするっていうのは反してない。」そんなこと、堂々とよく言えるなと思ったが、哲郎の眼はあまりにも本気であったことを察し「そうなんだ。」とどっちつかずの、あいまいな答えで返した。
　それから三十分経った頃、ちらほらと中学生が校門から現れ始めた。その頃にはワゴン車もいなくなっていたので、結局ワゴン車の存在は哲郎の思い込みで片付けられた。
「どうだ、中学生は子供じゃないだろ。」哲郎が制服姿の中学生を眺めて言う。
「うーん、やっぱり判断は難しい。」幸弘の想像よりは大人ではあったが、幸弘の通う大学にいる女子大生に比べると魅力は十分の一にも満たない。正直、ナンパしようと意欲も湧かないのだ。まだ、化粧もしていないし、遠くから見ても垢ぬけない様がなによりも魅

力がなかった。
「おれ、ちょっと話し掛けてくるわ。」哲郎はそう言うと立ち上がり女子中学生の方へと歩き出した。幸弘は止めようとも思ったが、どうせ断られるのが落ちだろうと「頑張れよ。」と本心とはかけ離れた言葉を掛け見送った。
　しかし、哲郎は女子中学生の集団に近づくも話し掛けることはなく、そわそわしながら見送り、また別の集団に近づくが、見送ることを何度も繰り返して、結局何もすることはなく、首を傾げながら戻ってきた。
　戻ってきた哲郎は「むずかしいな。むずかしいな」と繰り返していた。
「だから、作戦が必要なんだよ。」
「作戦って具体的に何かあるのかよ。」
「一人で歩いている人を選んで話し掛けるとか。」
「あっ、なるほど。」哲郎は、その手があったか、と心底驚いた顔をする。そんなことをも思いつかないで、よくナンパなんてしようと思ったなと心から呆れた。
「あとは、何を話し掛けるか考えておくことやどこで話し掛けるかも考えておけば。」
「おけばって・・・お前はやらないのかよ。」
「おれはいいよ。中学生には魅力がないよ。」幸弘が静かに断ると「ふーん。じゃあ、いいよ。おれだけクリスマスまでに絶対彼女作ってやるからな。」意気込んで「後悔してもしらねーからな。」とまで付け加えた。

実行、そして成功

そして、作戦開始の当日哲郎が車で来てくれ、というので幸弘は大学の講義を終えたあと、一旦家まで戻り、父親のワゴン車でコインランドリーまで向かった。
コインランドリーの前まで来ると哲郎が既にベンチで煙草をふかしていた。「よし、作戦決行の日が来たな。」哲郎はこの間買った勝負服を着て張り切っている。
「車で来たけど何に使うんだ？」昨日哲郎から電話でも聞いたが、当日発表する、の一点張りだった。高校からの付き合いなので、こうゆう時の哲郎の考えは、仕様もないことだとは、安易に想像はついている。
「あれだよ。中学生だと車では遊ばないだろ。運転できないし。でも、このときの女子の気持ちは他人より自分は進んでいたい、という気持ちはあるらしいんだ。」哲郎は自慢げに言う。幸弘は、それはインターネットにより知識だということは想像できたが、それを指摘することは野暮だと考え、静かに相槌を打った。
「だから、ドライブに行きませんかって誘うんだ。」哲郎は嬉しそうな顔で言った。「馬鹿な」と幸弘はすぐに吐き捨てる。
「いきなりドライブに行きませんかって言って来る奴なんていない。」
「そんなことはない。他の奴らと同じことをやろうと考えるな。いいか。おれ達は差別化攻撃で行くんだ。」哲郎はどっかの企業みたいな言い草を言う。
「そうゆう考えはその道を極めた奴が言う台詞だ。お前はナンパの初心者だし、この間なんて話すら掛けられなかったじゃないか。」
「いや、あれは調子が悪かっただけだ。今なら大丈夫だ。」哲郎は無根拠に自信あり気に言った。幸弘は、こいつに何を言っても駄目だ、と判断して「じゃあ、勝手にしろ。」と言うと、「ああ、心配

するな。うまくやるさ。」と親指を立てて言うので、ただ呆れるだけだった。また、幸弘は同時に違和感を覚えた。
「でも、哲郎は運転できないだろ。ドライブデートはできないじゃないか？」哲郎は免許を持っていないし、車も持っていなかった。
「いや、・・・だからお前が運転して、おれがトークで女の子を楽しませるんだ。」哲郎は少しバツが悪そうに言った。それで、自分に車で来いと言ったのだと今更に気付いた。もしかしたら、哲郎は一人でナンパする勇気がなく、ドライブというのは強引に自分を誘うこじつけの理由かもしれないと察した。
「わかった。でも、女の子を誘うのはお前の仕事だからな。おれはあくまで運転手だ。」幸弘は仕方なく了承する。幸弘自身も哲郎のナンパがどんな展開を迎えるのか興味があった。

幸弘達がしばらくベンチに座っていると中学生達が校門から出てきた。しかし、哲郎は動かないで煙草をふかしている。
「おい、出て来たけど、行かないのか？」幸弘は哲郎に動く気配がないので訊ねた。
「まだ、タイミングじゃない。」哲郎は煙を吐きながら言う。おそらく、勇気が出ないだけだろうと思ったが、幸弘は何も言わずに隣で中学生の帰宅を眺めていたら、前方に一人で歩くジャージ姿の女の子に気付いた。その女の子は幸弘の見には他の中学生とは少し違う雰囲気を持っているように見える。顔は色白で可愛いし、中学生にしては少し大人びて見える印象があった。
「おい、あの子がいいんじゃないか？」幸弘はジャージ姿の女を指差して言う。
「へぇー、じゃあ、話し掛ければ。」哲郎は煙草をふかしながら冷淡な声で言った。幸弘はその一言に少し腹が立ち、少し強がって哲郎を驚かせてやろうと「ああ、じゃあ、おれが話し掛けてみるよ。」と幸弘は立って話し掛けに行くフリをした。
「えっ、本当に行くのかよ。」と哲郎は予想通り慌てて引き留めて

訊いてきた。
「ああ、行ってくるよ。」幸弘はあまりに効きめがあったので面白がって言う。「正気かよ。」哲郎はすぐに吐き捨てた。
「だって、お前が行けって言ったんだろ。」
「そうだけど、本気で行くとは思わなかった。」哲郎は何故かテンパっている。
「じゃあ、行ってくるから。」幸弘が歩き出すと、哲郎が何故か付いてきた。「付いてくるなよ。」幸弘は哲郎を邪険に手で払う。しかし、哲郎は「ナンパをするのはおれの仕事だ。」と主張して無理に付いてきた。幸弘は何故か退くことができず、気が付いたら女の前まで歩いていた。
「あの、・・・」幸弘は女に話し掛ける。女は振り向く。遠くから見たとおり大人びた印象は変わらなかった。薄らと化粧もしているようだ。
「はい？」女は目を見開く。少し警戒をしているように見えた。その時、哲郎が後ろから身を乗り出してきた。
「おれ達と今からドライブに行きませんか？」後ろから哲郎が幸弘に対抗心を燃やして言った。
「えっ」女はいきなりのデートの誘いに、ぽかんと口を開けている。
「えっ・・・あ・・いや」幸弘も元々ノープランで話し掛けたので気のきいた言葉が出て来なかった。それどころか、やばい、これじゃあ、変質者だ。と思いに駆られた。
「・・・いいよ。」女は強く、固く、何かを決心した表情で幸弘達の誘いを受けてくれた。
「えっ、マジでいいの。」
二人は人生初めてのナンパに成功した。

探し物

「ちげーよ。おれは順番を守れっていってんだよ。」スペードが大声でギャル男達に向かって声を荒げて言う。
「守れって、守ってんだろ。別におれ達は割り込みもしてないし。」ギャル男達も急に絡んできたスペードに対して負けずと言い返す。何故こんなことになったのだろうとファニーはこの言い争いを見ながら考えてみた。
　事の始まりは一本の電話だった。ファニーがバイトから帰ると計ったようにスペードから電話が掛ってきた。
「明日、奇跡を探しに行かないか？」スペードはまるでチケットが余った映画にでも誘うように奇跡を探すサイクリングに誘ってきた。ファニーは奇跡というものは探して見つけるものなのだろうかと考えていたら、「どうせ、暇なんだろ」と勝手に決め付けて「じゃあ、明日の一時に『バス停前公園』に集合だ」と要件を言うだけ言って切られたのだ。そして、奇跡という奇跡がみつからずバッティングセンターに遊びに来たことが原因だった。
「だから、おれが先に待っていたんだ。」スペードが自分の方が先に待っていたとギャル男達に向かって主張する。
「知らねーよ。お前はそこで一人でジュースを飲んでたんじゃねーか。」一人のギャル男がスペードの右手にある炭酸飲料を指差し指摘した。ファニーはそれを聞きながらその通りだと心の中で呟き呆れた。
　ファニー達がバッティングセンターに来ると一組の親子だけだった。しかし百二十キロは親子に占領されていたのだ。ファニーは仕方ないので百十キロを打ったが、スペードは百二十キロを打ちたかったらしく、百二十キロのマシンを打つ息子を指導する父親の後ろに並んでいた。しかし、奇跡を探す為に長く自転車を漕いだ疲れからか、スペードは自販機でジュースを買い、ソファーに座ってジュ

ースを飲んでいたら、空いた百二十キロを丁度よくやってきたギャル男達に取られてしまったのだ。
「それは屁理屈だ。おれはあの子供が打ち終えるのを三百円使い切る間ずっと見ていたんだぞ。」スペードは打ち終えたばかりの子供を指差して言った。しかし、ギャル男達はそんなこと知らないし、関係なかった。
「うるせえな。だから、知らねえよ。つーか、お前こそ並べよ。」一人のギャル男が言った。
「だから、並んでたつーの。」スペードはそう言うと「なぁ、おっさん。」と子供の親に同意を求めた。
「まぁ、後ろにはいたけど、あの子らが来たときはソファーに座っていたからね。」子供の親は遠慮がちにギャル男を支持した。
「何だよ。あんたの息子がいつまで待っていても、おれと交代しなかったのがいけないんだろ。おれがいけないっていうのか。」と子供の父親に怒りの矛先を向けると「つーかお前は今日平日なのに学校はどうした。」と子供にまでに憤慨した。確かに、一人でマシンを占拠するのはルール違反だとファニーも思った。
「今日は創立記念日だよ。学校休み。そんなのもしらねーのかよ。」子供が冷淡な声でせせら笑う。
「おめーの学校の事情なんか知るか。最近はゆとり教育かしらねーけど、甘過ぎるんだよ。ガキは学校行っとけ。おれがガキの頃は土曜日も学校があったぞ。」スペードは子供にむきになって言った。そういえば小学校の頃第一，三土曜日は学校あったなと一瞬懐かしく思ってしまった。
　スペードはそれから、お前らみたいなゆとった自由奔放な奴らが遊び心で犯罪を起こすんだと言いがかりとも思える発言を残して、ギャル男達の打つ百二十キロの隣の百五キロで「今日は調子が悪いな」と嫌みを呟きながら会心な打球をいくつも飛ばし、ギャル男達に地味な復讐に取り掛かっていた。
スペードは鬱憤を晴らすかのように打ち続けて、終わる頃には百円

で十五球のバッティングセンターで総額千五百円も打っていた。その頃には親子もギャル男達も帰っており、結局百二十キロのマシンはスペードが占拠していた。

スペードは打ち終わるとお腹が空いたのか「飯を食いに行こう」と提案してきた。ファニー達は近くにジャンクフードを食べに駐輪所まで戻った。

「スペード、それは自分の自転車だよな？」ファニーは心配になって訊ねる。

「ああ、そうだけど。どうしてだ。」

「いや、自分の自転車ならいいんだ。」

ファニー達は自転車を走らせた。スペードは以前鍵が掛っていなかったからといって勝手に盗んだことがあった。スペードが言うには最後に元の場所に戻したからギリギリセーフだ、と主張をしていたがあれは完全に盗難であった。

二人が中学校の前を通り過ぎようとしたら丁度下校時間だったらしく大量の中学生が校門から出てきた。ファニーはぶつからない様に通り過ぎようとする。その時一人で歩く女の子がいた。ちょっと可愛いなと思いながら通り過ぎようとしたとき「おっ」とスペードが反応を示した。

ファニーは速度を上げ、スペードと並行して走りながら「今の子、結構可愛かったよな」と言うと「今の女の子はビンゴだ」とスペードは不敵な笑みを浮かべた。

スペードは意外にロリコンなのかと思い「スペードの好きな女のタイプってどんなタイプだ」と聞くと「おれは女に困っては無い」と答えにならない答えを返された。スペードの中身は非常に残念だが、身長が高く、顔も整っているのでその台詞には妙な説得力があった。

店に着いて、ファニーがハンバーガーを頬張っている時だった。

「奇跡を見つけた」とスペードが不敵に笑った。

集合

朝起きると二時だった。昼に起きるとなんだか損した気分になる。なぜなら、今日の夜はおそらく四時を過ぎるまで寝むれないだろうし、次の日もまた昼過ぎに起きることになる。悪循環になるんだ。そうして、三日間ぐらい、夜が中心の生活になる。それが耐え難い。夜はどうしてもネガティブになる。なぜなら、ファニーがフリーターだから。人生の展望が全く開けないからだ。そして、今日昼過ぎに起きたのはバイトの仲間であり、フリーター仲間のトミーのせいだった。トミーとは中学、高校と一緒だった。しかし、特別仲がよかったわけではない。それどころか、中学時代には見たこともなかったし、高校では二年，三年と同じクラスだったが、一度も話したことはなかった。トミーは女だ。だが、正直不細工だ。身長が小さいし、に太っている。だから、スタイルが悪い。そして、性格も悪い。褒めるところがないぐらいの奴だ。それが、ファニーのバイト先に新しい仲間として入ってきたのだ。最初はほとんど、無視をしていたのだがカツラ店長にいびられているトミーを見て、励ましてあげようと考えた。それが間違いだった。

携帯を見る。三件のメールがあった。すべて、トミーからだろうと察した。どうして、自分は返信していないのに一方的に送ってくるのだろうと理解に苦しむ。メールとは送ったら、返信が来て、さらに自分が送るというのが正しいやり方だとファニーは信じていた。しかし、トミーは違うのだ。送って、送って、送って、送る。まるで、悪徳セールスマンのような奴だった。メールを押し売りしてくるのだ。一方的に送って来てばっかりなのだ。メールを開くと『今日ぁ話しを聞いてくれてありがとぅ。すっきりした。次会うのは明後日だね。』と絵文字が一杯のメールが来ている。ファニーはうんざりする。電話を終えた五分後だ。散々、かつら店長の愚痴を聞いて、さらには全く知らないトミーの友達の愚痴を朝方の四時まで四

時間近く聞かされた後に送って来ている。もうそろそろ、と自分が何回言ったことだろう。トミーはファニーのそろそろ電話を切りたいという合図を無視し続けて約四時間喋り続けたのだ。さらにメールを開くと、十分後にも『ぁれ、ねたのかなぁ』などと、いけしゃあしゃあと送りつけてきていた。一週間前に時間が戻るなら、トミーとはアドレスを交換する自分を全力で止めるだろう。それどころか、まぁ、気にするなよ、なんてトミーに声を掛けない。バイトのことで相談に乗ってくれない、なんて相談に乗らない。ファニーは自分の選択に後悔をしていた。

しかし、メールの三件目は違った。知らないアドレスだった。開くと、『一五時十分にバス停前公園に来い。スペード』とメールが送られていた。自分の電話帳のアドレスとは違う。奴はアドレスを変えたのに自分には送らなかったのだろうとファニーは察した。一方的にメールを送りつけてくる奴もいれば、必要なメールをしない奴もいる。この世界は自己中心的な奴ばっかりだと、ファニーは世界に対してうんざりした。

予定よりも十分速くバス停前公園に着いた。スペードの話によればダウスの車があるはずであった。

辺りを見回して見る。一台のワゴン車が止まっているのが視界に入った。ダウスの車だ。近づいて運転席をノックするとダウスが窓を開けた。

「おう、ファニー久しぶりだな。元気か？」ダウスは相変わらずの老け顔を笑顔にして言った。

「ああ、ダウスも相変わらずだな。」と返すと「何が相変わらずなんだ？」ダウスは眉をしかめた。ダウスは筋肉質で身長が百八十五センチぐらいある。最初に会ったときは厳つい顔した奴だな、と思っていたが見馴れると老けているだけなのではないかと考えるようになった。だって、この顔でファニーやスペードと同じ二十二歳なんだから笑ってしまう。

「いや、相変わらず厳つい奴だなと思っただけだよ。」
「はっはは、そうゆうことにしておいてやるよ。」ダウスは笑って返すと、親指で後ろを差し、速く乗れよ、とファニーを促した。
　ファニーは後部座席のドアを開くとそこにはスペードではなく、ジャージを着た女が座っていた。一目見て『月とスッポン』だなとトミーを思い出して思った。
「あれ、君がファニー君？」女がファニーを見て言う。
「そうだけど？」ファニーは遠慮気味に答える。
「わたし？」女は自分のことを指差して言った。「私はマコト。マ・コ・ト、覚えてね。」
「マコト？　えっ？　マコトって女だったの？」ファニーはダウスに訊いた。
「ああ、驚いただろ？」ダウスは顔に似合わない白い歯見せて言う。ファニーはマコトのことを名前だけ知っていた。だが、完全に男だと決めつけていただけにマコトが美女だったことに驚いた。そして、マコトを見て、トミーと比べてしまうことにも、また自身で驚いていた。
「ああ、びっくりした。」マコトの身長は一五五センチぐらいでトミーと同じぐらいだが、決定的に違うのが顔とスタイルだ。短い髪は白い肌と小さい丸顔に似合っていて、活発な女の子に見えそうだけど、文学少女にも見える。丸い輪郭のせいか、幼い顔立ちに見えた。また、少し話しただけだが、がさつなトミーの喋り方と違ってマコトの話し方はアクセントが良く、リズミカルに言葉が耳に入ってくるのが気持ち良かった。これなら五時間は話を聞いているだけでも苦にならないだろう。
　しかし、一つだけ気になる点があった。彼女はジャージを着ていることだ。何故か、彼女は学校指定のようなジャージを着ていた。
「でも、なんでマコトさんはジャージを着ているの？」ファニーは気になったので訊いた。
「さぁ。あの変人が中学校のジャージを着て来い！　とか電話で言

ってきたのよ。だから、あたしは中学生じゃないからね。」マコト自分の着ているジャージを摘まんで、律儀に教えてくれた。
「マコトはおれ達の一つ上の二十三だぞ。」運転席のダウスが言う。
「へぇ～、一つ上か。」やっぱり童顔だと思った。
「うん。この中だと、私が一番年上かぁ～、いつまでも若いと思っていたけど、自分より年下見ると、自分もいい歳だなとか思っちゃうな。」
「何言っているんですか。一，二歳なら気合で何とかなりますよ。マコトさん美人だし。」ファニーが横にいるマコトを励ますとダウスが「ファニーが口説いている」とからかってきた。マコトも「ファニー君、顔はいいけど頼りなさそうだから嫌よ。」出会って十分も経たないうちに振られた。

スペードは約束の時間を十分過ぎた頃に来た。スペードは何故か浮かない顔で助手席のドアを開けて座った。
「遅いぞ。珍しいな。スペードが約束の時間に遅れるのは？　何かあったのか？」ダウスが不思議そうに訊ねる。
「いや、変な奴がいてな。」スペードは首を傾げる。「そいつをちょっと観察していたんだ。」スペードが考え込むように言った。
「ねぇ、なんで、私こんな格好しなくちゃ駄目なの？　いい加減、理由を教えてよ？」マコトが後部座席から身を乗り出してスペードを問い質す。
「ああ、それはな・・・・」スペードは先程の考え込む顔とは一転させ嬉しそうな顔で「釣り人大作戦だ。」と今回の奇跡を発表した。
「釣り人大作戦？」マコトがしかめつらになる。そして、答えになっていないでしょ、とでもいいたげな顔で「それが、私の格好と何が関係あるの？」と子供に訊ねるようにやさしく訊ねた。
「ああ、今日マコトの出身中学でナンパが行われるんだ。」スペードがマコトを見て言う。
「ナンパ？　あの、知らない女を遊びに誘うナンパか？」ダウスが

頭に『？』マークを浮かべるような顔で不思議そうに口を挟んだ。
「ああ、そのナンパだ。」スペードがダウスの質問に答え、海もない中学校で船の難破が起こるはずがないだろ、とつまらなくおどけた。
「ああ、そこで、だ。」スペードがマコトに視線を戻す。「その、ナンパ師達をおれ達が釣って、お仕置きをするんだ。」と豪語した。
「まさか、マコトさんを餌にして、釣るのか？　・・・危険じゃないか？　だって、スペードが運命を見えたってことは・・・犯人は相当危険な人物なんだろ。」ファニーがスペードに危険性を訴える。スペードには人の運命が見えるらしい。らしい、というのはファニーにもまだ完全に理解ができていないからだ。そのスペードの怪しげな能力を生かして人の命を救うというのが『奇跡起し隊』というファニー達四人のグループである。
「大丈夫だ。」スペードは無根拠に自信に満ち溢れる顔で「おれ達が付いている。」と主張する。
「おれ達が付いているって・・・」マコトは困惑を浮かべる。
「それに、相手がマコトさんを選ぶっていう確証もないだろ。」ファニーが疑問を口にする。
「えっ？」マコトがファニーを凝視した。あんた本気で言ってんの？　とでも言いたげだ。
「えっ？」ファニーも何故マコトに睨まれなくてはいけないのか、と意味がわからずマコトを見る。
「・・・なに？　・・・ファニー君はわたしが中学生より劣っているとでも言いたいわけ？」マコトは不快さと怒りをあらわにする。
「・・・いや・・・そういう意味ではないですけど・・・」ファニーはマコトの癇に障ることを言ってしまったのかと戸惑った。
「だってそうゆうことでしょ。私なんかナンパしないって言いたげじゃなかった。」マコトは口を尖らせる。なんだ、そのいちゃもんは、と思いながらも「いや、マコトさんは美人ですよ。」と前置きをしてから「でも、相手にも好みとかあるし、中学生をナンパに来

るぐらいだから、かなり偏った性癖の持ち主かも・・・しれないじゃないですか？」ファニーはマコトの機嫌をこれ以上損ねないように慎重に言葉を選びながら誤解を解こうとした。
「じゃあ、ファニー君だったら、私と中学生だったら、どっちをナンパする？」マコトは唐突に質問してきた。
「えっ？」ファニーは眉をしかめる。
「中学生とわたし、どっち？」マコトは顔を近づけてむきになって訊く。マコトの体が近づき髪の匂いかわからないがマコトからほんのり甘い匂いがした。一瞬、甘い香りに意識を持って行かれそうになるが、しっかりと冷静さを取り戻す。正面を見ると、スペードとダウスが笑いを堪えているのが見えた。
「話の論点がずれていますよ。おれがナンパするわけじゃないんだから。」ファニーが態勢を後ろに下げながら訴える。
「いや、これは重大な質問だ。これにはファニーは答える義務がある」ダウスがにやにやしながら訳のわからない理屈を持ち出してマコトに加勢した。ファニーはその義務はどこから生まれたのかと訊ねたくなったが「そうよ。どっち？」とマコトの真剣さに圧されて無理だった。
「えっと・・・それは・・・マコトさんですよ？」ファニーは言葉に詰まりながら答えた。
　あからさまにも棒読みになってしまったにも関わらず「え～、やっぱり～」マコトは両手を合わせて喜ぶ。
「はい、やっぱりですよ。」ファニーはマコトが機嫌を取り戻したことをよそに調子の良いことを言う。　しかし、こんな答えの決まった質問で機嫌を取り戻し、全くわけのわからないことで怒るマコトを見て、なんだか行く先が不安になった。見た目は美人なだけに無性に残念な気持ちになる。
「それじゃあ、決定だ。『釣り人大作戦』決行だ。」スペードが嬉しそうに言った。

実行、そしてトラブル

「なぁ、マコトさんって変わってないか？」ファニーはスペードとダウスに訊ねた。
「ああ、変人だ。」スペードが平然と言い放つ。変人にも変わって見えるのかとファニーは心の中でこっそりと笑った。
「ああ、顔が可愛いだけに残念だけど。」ダウスが頷きながら答え
「だけど、変人じゃなかったら、こんなことやってもらえないから、そこにはちゃんと感謝しなくちゃな。」と言った。
「まぁ、そうだね。しかし、大丈夫かな。知り合いとかにあったら、可哀そうだけど。」ファニーは校門の前に立っているマコトを車の窓越しに見る。遠くから眺めるマコトはやはり可愛かった。
「なぁ、でもなんでジャージなんだ。制服じゃあ駄目なのか？」ダウスが制服ではないことに疑問を持ったのかスペードに訊ねた。
「いや、別に制服でも良かったんだが、セーラー服を着せるのはちょっと可哀そうだと思ってな。知り合いに会ったときセーラー服よりかは、ジャージの方がいいだろ」スペードが頬を触りながら答えた。
どっちもどっちだと、ファニーは思ったが、スペードにも人に気を使う心があるのかと別のところで感心してしまった。
　その時、ファニーの携帯が震えた。ファニーは携帯を開くとメールが一通届いていた。差出人は『トミー』と記されている。無意識で舌打ちが出た。
『おはよう。いま、何しているの？』とのメールだった。知るか、だいたい、おはよう、じゃないだろ、と心の中で呟く。返信しようか悩んだ。トミーのメールは一人言のようなメールが多かった。人のことを自身のブログだと勘違いしているのか、ブログをアップするような内容のメールなのだ。『東京で行列のできるラーメンを食べたの。おいしかった。』、『今日は王将の餃子を食べました。』

など人によっては自慢話にもとれるようなメールを大量に送りつけてくるのだ。だが、今回は珍しく疑問形なのだ。勝手に送りつけて来る一人言のメールではない。だから、いつものように無視はできなかった。　トミーとはバイトで顔も合わせるし、お互いフリーターなので必然的にバイトの回数も時間も長いので一番顔を合わせる人間でもあった。ここは円滑に人間関係を進める為に返信することに決めた。『返信』のボタンをクリックする。内容を考えた。メールをやり取りすることは避けたかった。だから、トミーを黙らせる必要があった。頭をひねる。知恵を絞る。

『いまは忙しい。』と打ち『送信』のボタンをクリックした。

「おい、マコトがナンパされたぞ。」スペードが助手席から身を乗り出し嬉しそうに言った。

「えっ、マジで？」急いで携帯を閉じる。

「なんだ、この緊急事態に彼女とメールか？」スペード鋭い目でこちらを見る。冷やかしやからかっているのではなく、奇跡隊の活動をなめるな、と怒っている目だ。

　それと、ほぼ同時に車が発進した。

「悪い、でも、彼女ではない。バイト先の仲間だ。ちょっと仕事のことで。」彼女ではない、ということを強調して、弁明した。

「まぁ、いい。気をつけろ。」スペードは態勢を戻す。

「それより、マコトさんは？」

「ああ、あの車だ。」ダウスが顎で信号を止まっているワゴン車を差した。ダウスが運転するファニーとスペードを乗せた車もマコトを乗せた車の後ろに止まった。

「あれか。」マコトは大層傲慢な顔で車に乗り込んだんだろうな、とファニーは想像した。

　しかし、こんなに計画通りに事が進んでいいのかと逆に不安になる。マコトが簡単にナンパされるなんて最近の中学生は魅力がないのかと歩く中学生を見渡した。確かにぱっと見た感じはマコトに遠く及ばない。どの中学生もこれから大人女性になる発展途上中と感

じだ。それなりに可愛い女の子もいるけど、ファニーもナンパするとしたらやっぱりマコトを選ぶだろうと改めて思った。あれはあながち間違った質問ではなかったのかもしれない。
　ファニーがそんなことを考えながら中学生の下校を眺めていると、ある光景が目に映った。
女子中学生が車に乗り込んで行く。あれは、おそらく親兄弟ではないだろう。車への乗せ方が接待のようだった。
「おい、あっちでもナンパが行われているぞ。」女子中学生の乗った車を指差して慌ててスペードの肩を掴んで揺する。
「えっ？」スペードがファニーの指差した方向を見た。女子中学生を乗せた車はファニー達の反対車線に動き始めた。
「今、動き出した車だよ。ほら、あの車」ファニーはもう一度声を荒くして指差す。
「うそだろ。」スペードは目を丸くして固まった。そのとき、信号が青になって前のマコトの乗る車が動き出した。
「おい、スペード、どうすんだ。車が動いちまったぞ。」ダウスが声を荒げた。
「あっちだ。ファニーが指差した方の車を追え。」スペードが大声でダウスに指示する。
　ダウスは言われた通りに、女子中学生の乗った車を追う為にUターンした。
　キッキー、プーと不愉快な音が響く。急ブレーキの音にクラクションの音だ。一歩間違えば事故になっていた。しかし、そんなことはお構いなしにダウスはアクセルを一杯に踏んで、大きなエンジンの音を発てて、女子中学生が乗った車を追った。
「おい、マコトさんはどうするんだよ」ファニーはスペードを問い質す。
「仕方ねぇだろ。まさか、二組も馬鹿がいると思わなかったんだよ。最悪マコトには携帯で連絡すれば問題ない。」スペードは携帯で急

いでメールを打ち始めた。
「でも、心配だ。早めに手を打とう。」ダウスがハンドルを持ちながら重い面持ちで言った。
「ああ、そうだな。」さすがのスペードも心配そうな顔をしていた。
「ブー、ブー」とスペードの携帯が鳴った。ずいぶん速いな、と思ったがスペードがすぐに喚いた。
「お、おい、あいつアドレス変えてやがる。」スペードは信じられない、と言いたげな表情をした。大きな目をさらに大きくさせ、ダウスとファニーを交互に見た。
「お前だって、勝手に変えていただろ。」ファニーが起きたときのことを思い出し指摘する。
ここで「あっ・・・」とダウス何かを思い出したように口を開けて固まった。「どうした？」スペードが刺々しい声で訊く。
「・・・そういえば、今日来るとき携帯買い変えたって言っていたな。」ダウスがハンドルを持ったまま言った。
「はぁぁあ、どうすんだよ。」ファニーが叫ぶ。
「電話すればいいんだろ。」スペードが眉をしかめて言う。「無理だ。」しかし、ダウスがすぐに吐き捨てた。
「なんでだよ。」スペードイライラが募った声ですぐに訊く。
「あいつ、彼氏と別れたらしいんだよ。先週に。」ダウスはハンドルを持ったままバツが悪そうな顔になる。
「だから、なに？」
「番号も・・・変えたらしい。」
「・・・」二人は黙った。
「おい、ふざけんなよ。どうするんだ。」ファニーはスペードの体を掴み、揺すった。
「落ちつけ。まだ、マコトの方が殺人者だとは決まっていない。」スペードはファニーの腕を払う。
「あっ、そうだ。ダウスの携帯は？　マコトさんの番号入ってないのか？　なぁ。」ファニーはダウスに訊いた。だが、すぐに「入っ

てない。」とスペードの声が遮った。
「なんで？」
「こいつは前に浮気がばれたんだ。それで、女の番号すべてを女に消されたんだ。」スペードは神妙な口調で言った。
「はぁぁあ、ふざけてる場合かよ。ふざけんなよ。」ファニーは前にあるダウスの座る運転席を殴った。
「大丈夫だ。」スペードが身を乗り出してファニーの腕を掴んで言った。「なにが大丈夫なんだよ。」ファニーは声を荒げる。
「奇跡は起きる。奇跡を信じろ。」スペードは真顔で言った。ファニーはもう呆れて何も言えない。言いたくなかった。

追跡者・山口

背の高い男がこちらを見ている。どうやら、双眼鏡に集中し過ぎたようだ。男は目を見開き、口をあんぐりと開けている。仕方ない、一度距離をとるしかない。山口はそう決意して、車を走らせることにした。

車を一度動かす。、あの車がいなくなっていたらどうしよう、という懸念があったが、戻ると車はまだあった。双眼鏡で車を覗くと女が男をすごい剣幕で言い寄っている。何があったのだろうか？あの女は何者なのだろうかと気になる。

しかし、しばらくすると車が走り出した。山口は後ろから追跡を試みる。しばらく、車は走り続けて、また、車が止まった。山口も後ろに車を止め双眼鏡を覗こうとしたが、車から女が出てきた。あの女は何者だろうか？　一体何をしているのだろうか？　山口には理解不能だった。だが、山口の心には嫉妬と怒りが溢れてくる。山口は携帯を1通のメールを打った。

ドライブ

女の子は中学生とは思えないほど落ち着いていて、大人の雰囲気を漂わせていた。不思議な魅力があるのだ。頬がふっくらとしているせいか、見た目は少し幼く見える。だが、その割には体が華奢だった。そして、決定的に幸弘を動かす魅力があった。年齢の割に彼女は豊乳だった。華奢な体に不似合いなアンバランスさが妖艶な色気を漂わせていた。幸弘が抱くある法則に幸弘は確信を得る。頬がふっくらとしている女は胸が大きい。

「ねぇ、名前はなんていうんだい。」哲郎が助手席から身を乗り出して、何故か変な言葉遣いで訊ねた。

「ふっふふ。マコトです。シンカイマコト。面白いですね。お兄さんはなんて言うんですか？」女の子はシンカイマコトと名乗った。

「マコトちゃんかぁ。格好いい名前だね。おれは哲郎って呼んで。それで、こっちは運転手。」まず、馴れ馴れしい。そして、中学生の女の子に向かって格好いい名前とはどうだろうか。最後に、自分は最後まで運転手として扱われるのだろうかと幸弘は不安な気持ちになった。そして、何故哲郎は助手席にいるんだ、と首を傾げる。

「運転手ですか？ふっふふ。面白いですね。」マコトは笑うと身を乗り出して「運転手さん、今日はよろしくお願いしますね」と顔を近づけ囁いた。やばい。この子は普通じゃないぞ、と幸弘の勘が働いた。この子はやばい、と。

「でも、マコトちゃん。なんでジャージなんだい。」哲郎は相変わらずの口調で訊ねる。

「え～と、う～んと、これはね。」マコトは少しうろたえた。

信号が赤になった。大型トラックの前に車を止める。ギアをドライブからパーキングに変えてブレーキを放す。

「ん？　どうしたんだい？」哲郎が後ろを振り向いて不思議そうにマコトに訊ねた。

「あっ、言いたくなかったらいいんだよ。」幸弘はハンドルを持ちながらバックミラーでマコトが困っていないか確認してフォローする。マコトは首元のジャージを指で掴み困った顔をしていた。そんなに困る質問なのだろうか、と幸弘は思う。だがすぐに、もしかしたら彼女は苛められていて制服を隠されたりしたのではないのか、と思い直し、勝手に心配をした。

「違うの。」マコトが口を開いた。「これは濡れちゃったの。掃除の時間に。」マコトは残念そうな顔をして言った。その言い方があっけらかんとしたものだったので、嘘ではないと思い幸弘は安心する。

「あ〜、マコトちゃんって意外とドジっ娘なんだ。」哲郎はうれしそうな顔をした。ドジッ娘という表現はいかがなものだろうか、と幸弘が疑問に思う。だが、哲郎の突飛な発言にもマコトは「ふっふふ。ドジっ娘って。哲郎さんって面白いですね。でも、わたし本当に少し抜けている所があるんです。周りからもよく言われるんですよ。天然なところがあるって。」マコトは笑顔を見せて答えた。幸弘はバックミラー越しにマコトの笑顔を見ながら冷静にメリットというものを考えた。マコトがこの車に乗るメリットだ。冴えない男二人のナンパなんかに乗ってどうする。哲郎の言った通り、友達よりも先に進んでいたい、という気持ちが働いてナンパされるという経験をするのも一理あるかも知れないが、いきなり車に乗せられるというのはリスクが高すぎる。マコトの話しを聞く限り、そんな計算もできない女子中学生には思えなかった。

信号が青に変わる。ブレーキを踏んで、ギアをドライブに入れ直す。大型トラックが動いたのを確認して、アクセルを踏んだとき、バックミラーでマコトを見た。マコトも幸弘を見ていたのか、はたまた、見られたことに気付いたのか、マコトと目が合った。マコトは幸弘と目が合うと、口元を緩めて微笑んだ。余裕のある笑みだ。母が子に与えるような、宥める笑みだ。幸弘は気まずくなって目を逸らした。彼女は本当に中学生なのだろうか、幸弘はそればっかり

が気になった。
なにか、裏に大きな秘密が隠されているのではないのだろうか、と勘繰ってしまう。例えば、後で怖い男が「おれの女に手を出したな。」と事務所に連れ込まれる展開とかあるのではないだろうか。幸弘はマコトに心を惹かれながらも、不安も抱いていた。

しばらく、ドライブを楽しみたいとの哲郎の希望で幸弘は車を走らせた。
幸弘は引っかかる所がいくつかあった。まず、掃除の時間に制服のまま掃除をするだろうか。少なくても、自分の中学校はジャージに着替えて掃除をしていた。それに、本当に天然の奴は自分が天然だということに気付かない。また、マコトは確実に哲郎に合わせて会話をしている。まるで、キャバ嬢のようだ。話をずっと聞いているが哲郎は兄弟、誕生日、星座、趣味、部活はやっているのかなど質問を終えた後、いまどきの中学生はなにをしているとか、学校は楽しいか、と相手にまかせる質問しかできなくなっていた。哲郎はトークで女の子を楽しませると言っていたが、完全に楽しませているのはマコトであった。哲郎はキャバクラに遊びに来るオヤジのようにあしらわれている。しかし、こんな会話を中学生の女の子ができるだろうか。
「そろそろ、ドライブは止めてなんかしないか?」幸弘が二人に訊いた。
「そうだな、マコトちゃんなにやりたい?」哲郎が身を後ろに向けて訊く。
「なんでもいいよ。カラオケ、ボーリング、ビリヤード、ゲーセンとなんでも対応するから。お金も哲郎さんが払うし。あっ、別に食事でもいいよ。」幸弘がハンドルを握りながら言う。
「え〜、本当。じゃあ、ボーリングがいいかな。」マコトは甘い声で答えた。
「ボーリングかぁ。可愛いなぁ。マコトちゃんは。」哲郎が助手席

で独り言のように漏らす。ボーリングのどこが可愛いのだと、と訊ねてみたくなるのを我慢する。

「わかった。ちょっと先にあるショッピングセンターにボーリング場があったから、そこにしよう。」幸弘は国道の終わりを左折して、そこから十キロ程あるショッピングセンターを目指した。

追跡者・山口　2

山口は一人で漫画喫茶に来ていた。ドリンクバーでアイスティーをグラスに注いで扉を開く。そこには、四つのビリヤード台と二つのダーツの台、スロット台が二台置いてあった。テーブルにアイスティーと受付でもらったダーツの矢の入ったかごを置く。椅子に座ってアイスティーを口に含む。ミルクとガムシロップを入れないアイスティーは少し苦かった。

後ろを振り向く茶色い髪をもっさりとさせ、焼けた肌が特徴的な三人の男達と女がビリヤードをやっている。

山口はダーツ台に矢を投げる。「ドン」と矢が刺さった。もう1度投げる。「ドン」

矢が的に刺さるだけで、機械は一向に動かなかった。

ダーツは初めてだった。漫画喫茶には何度か来たことはあったが、ドリンクバーと漫画目的だったし、ダーツやビリヤードなどには全く縁がなかったのでやり方がわからない。

テーブルに置いてある紙に手を伸ばし、機械の動かし方が書いてあるか説明書を読む。だが、投げ方や注意事項が書いてあるだけで機械の動かし方は書いてなかった。

機械まで近づいてボタンをいじってみた。上の画面が変わるがすべて英語表記で意味がわからなかった。　適当に緑と赤のボタンをいじる。

「どうしたんですか？」後ろから急に声がした。「えっ」後ろを振り向くと女がいた。

「いや、えーと、その・・・」急に話し掛けられ山口はあたふたした。女に話し掛けられることなど、予想外だった。

「やり方がわからないんでしょ。ダーツ初めてなんですか？」女は長い棒を持ちながら、やさしい口調で訊ねてきた。

「・・・は、はい。えっと、気晴らしにやろうと思ったんですけど、

やり方がわからなくて。」急に話し掛けられて戸惑いながらも、山口は平然さを装いながら答える。
すると女は「えっとね。」といいながら機械を操作し始め「初心者はやっぱりカウントアップがいいと思うんだ。」といいながらゲームの画面を出してくれた。
「ふっふふ、わからないことあったら、わたしに訊いて。わたしはあそこでビリヤードをやっているから。」女はビリヤード台を指差して笑顔で言った。
「奈津美ちゃん。何してるの？」派手なシャツを着た男が女に話し掛ける。
「あっ、ごめん。わたしちょっとトイレ行って来るね。」奈津美と呼ばれた女はそう言うと空いているビリヤード台に長い棒を置き扉の方へ歩いて行った。
山口は取り敢えず奈津美の出してくれたカウントアップというゲームをする為に一本の矢を手に取った。
矢を的に投げる。今度は機械が動き、上の画面に得点が表示された。

ボーリング

ショッピングセンターの駐車場に車を止めた。
「こんな所にショッピングセンターがあるんだ。」マコトは建物を見上げて意外そうな声を出した。
「ああ、ここは『スクイズモール』と言うんだ。建物の中の店はほとんど潰れているけどね。」幸弘が答える。スクイズモールには、大型電気店、大手のハンバーグレストラン、大型ゲームセンター、コンビニ、その他に服屋がある。しかし、中に入るとほとんどの店は潰れていて中がスカスカのショッピングセンターである。
「へぇ～」マコトは演技なのかはわからないが「やっぱり、すごいね。いろんなところ知っているんだね。」と感心したように言う。そして、「野球のスクイズと同じ名前だ。」と笑った。幸弘は少し嬉しくて「ほら、あっちを見て、あっちにもスーパーとホームセンターまであるんだ。」とスクイズモールの便利さを教えてしまった。
「うわぁぁ、便利そう。」マコトは笑顔を見せる。
「おい、早く行こうぜ。」哲郎はそう言うと、ずかずかと1人で歩き始めた。おそらく、久しぶりのボーリングで良い結果を残せるか緊張しているのだろうと幸弘は察した。幸弘はマコトにボーリングのアベレージを訊ねながらボーリング場のあるゲームセンターへと足を向けた。

ボーリングが始まるとマコトの独壇場だった。始まって初っ端からターキーを叩きだし、その後も順調にストライクを重ね幸弘と哲郎に大きく差をつけて断トツのトップだった。
「・・・マコトちゃん、ボーリング対してやらないってさっき言ってなかったっけ？」幸弘は前に座るマコトに低い声で訊ねる。
「はい。あんまりやりませんけど。」相変わらずの笑顔でマコトは答える。

「・・・それにしは上手すぎだよ。ほら、哲郎なんて、あんなにしょぼくれちゃっているじゃないか。」　自販機に向かう哲郎の背中を指差して言う。その背中には、はっきりと『哀愁』と書いてある。
哲郎は自分の不甲斐なさを嘆くように「おい、またストライクだよ。」とマコトがストライクを出すたびに泣きそうな顔で幸弘に言い寄って来た。どうやら、哲郎の美学には男は女に負けてはいけない、というものがあるらしい。
「手加減した方がいいですかね。」マコトは妖艶な笑顔を見せて言う。
「いや、そうゆうことじゃないんだけど。・・・」幸弘はまじまじとマコトを見る。
「・・・どうかしました？」マコトは首を傾げる。
「・・・君は本当に中学生なの？」マコトの妖しさに惑わされて、もう少し婉曲に訊ねようとしたが、自分でも馬鹿だと思うぐらいにストレートに訊いてしまった。
「・・・どうして？」マコトは不思議そうにまた首を傾げた。
「いや、ただ、中学生にしては、大人すぎるような気がして。」幸弘は率直に言う。
「ふっふふ、じゃあ、いくつぐらいに見えますか？」マコトは顔に手を当てて訊ねる。
「・・・見た目は二十二歳ぐらいで、精神年齢は少なくてもおれらより上に見えるよ。」幸弘は言い終えた後、なんだか、からかわれているようで少し悔しかった。マコトには余裕がありすぎる。
「ふっふふ、二十二歳かぁ、・・・幸弘さん。」マコトは幸弘の名を呼ぶ。
「なに？」幸弘が返事をする。「中学三年生はいくつか知っていますか？」
「・・・十四か十五だろ。」幸弘が答える。
「はい、その通りです。それがわたしの年齢です。」マコトはそう言うとまた妖艶な笑顔を見せた。幸弘は声を失って見惚れてしまっ

た。「ジュース買って来たぜ。」哲郎が元気のない声で、ハッと意識を取り戻した。
「おお、ありが・・・」幸弘が哲郎にお礼を言おうとしたら哲郎の後ろに三人の男が立っていた。
「おい、おまえら面を貸せ。」体格の良い長身の男がドスの効いた声を出した。
幸弘達は絡まれた。

対面

「あの女の運命にはまだ死がない。」スペードがボーリングをする女を見て呆然とした顔で言った。
「はぁぁあ、どうすんだよ。」ファニーは人目をはばからず大声で叫ぶ。
「・・・取り敢えず、中学校に戻ってリスタートするか？」ダウスが冷静に言う。
「ふざけんな。なにがリスタートだ。サッカーしているんじゃねーんだよ。」ファニーがダウスに声を荒げる。こちらがハズレならマコトが当りということだ。もう、マコトがナンパ師の車に乗ってから一時間は経過している。ファニーはマコトの安否が気がかりで仕方なかった。
「ブー、ブー」とスペードの携帯が鳴った。
「ん、もしもし」スペードが携帯に出る。呑気な出方だ。もっと、焦ったりしてもいいのではないか、とファニーはスペードに不信感を抱く。だが、「えっ、マコトか？」スペードが目を見開くので、ファニーは驚いた。
「マコトから電話なのか？」ファニーがスペードに訊ねる。だが、「・・・いや、おれらはいない。ちょっと待ってくれ、ここはうるさいから外に出る。いや、違う。」と言って、スペードは走ってゲームセンターの外に出て行ってしまった。ファニーとダウスは顔を見合わせてスペードの後を追う。
「・・・いや、本当に悪いと思っているって。違う。こっちにもトラブルがあったんだ。・・・・わかった、時間を稼いでくれ。・・・わかったって。すぐに行く。・・・・・」スペードは電話に向かって、事情を説明して電話を切った。
「マコトの居場所がわかった。」スペードが顔をしかめて言う。
「・・・そうか。よかった。」ファニーは安堵のため息を吐きなが

ら答える。
「それで場所は？」ダウスが訊ねた。ダウスの顔にも安堵の色があった。
「・・・ほっかほっかステーションだ。ここからどう考えても2時間はかかる。どうやらあっちが当りだったらしい。犯罪の匂いがするっていていたぞ。」スペードは片手携帯を握りながら苦虫を噛んだ様な顔をする。
「じゃあ、速く行こう。」ファニーを促す。
だが、スペードが「いや、それより先にやることがある。」と言って店内に戻って行った。
先にやることって何だよ、とスペードに文句を言おうとしたら「そうだな。」とダウスもスペードの後に続いたのでファニーは仕方なく黙って二人の後ろに付いて歩いた。

店内に入った後のスペードの足取りは軽かった。自動ドアを潜るとずんずんと奥の方に歩いていった。途中、ユーフォーキャッチャーを取り囲んでいる女子高生がスペードに気付き、隣の女の子の肩を叩いて、指を差す。言いたいことはわかった。スペードの容姿は人目を惹く。誰もが彼に近づきたくなる。だが、スペードはお構いなしに歩き続け、女子中学生をナンパしたもう一組の男達の前で止まった。そして、なにをするかと思ったら「おい、お前ら面貸せ。」スペードは三人の前で言い放った。低い声ですごみを利かせた言い方だった。
一人はジュースを持ちながら固まってスペードを見上げている。ジュースはコーラとカルピスとオレンジジュースだった。
「・・・な、何ですか？　・・・警察呼びますよ。」ソファーに座った男がスペードを見上げて言った。驚いているようではあるが、怯えている様子は感じられなかった。発した声からは動揺の色は感じられず、スペードから目線を逸らそうともしない。意外と胆の座

った男なのかも知れない、とファニーはスペードの行動に驚きながらも冷静に分析する。
「別にいいよ。呼んだって。おまえら、その子をどうする気だ。」
ダウスが顎でジャージを着る女の子を差す。
その一言でソファーに座る男の顔色が変わった。瞳孔が左右に動き、焦燥感に駆られていることがはっきりとわかった。
「・・・関係ないだろ。お前らに。」ソファーに座る男が力なく言う。
「ああ、関係ないけど、おれは犯罪が許せないんだ。」スペードが座っている男を見下して言った。
「おれらは見ていたんだよ。お前らがその子を遊びに誘うのを。中学生なんか遊びに誘ってどうすんだ。まさか、中学生を誘ってナンパしている気分になってんじゃねーよな。」スペードが大声を出して、テーブルに足を「ドン」と叩き乗せた。
ボーリング、ゲーム、卓球、このゲームセンターで遊んでいる人達の目線がファニー達に集中していた。客同士の揉め事をどう対処するべきなのか悩んでいるのか、三人の店員が不安そうに相談をしていた。
「・・・」座った男はスペードを弱々しく睨む。ジュースを持った男はまだ、ジュースを持ったまま固まっている。
「・・・・・・兄ですよ。」
今まで一言も言葉を発しなかったジャージを着ている女の子がぽつりと漏らすように衝撃の告白をした。
「・・・へ？」
スペードが足をテーブルに乗っけたまま間抜けな声を出した。スペードの顔から血の気が引く。スペードの青ざめる顔を見て、スペードも動揺するときがあるのだな、と女の発言よりもファニーはそっちのことに驚いた。
「私の兄です。この人は。」ジャージの女の子は座る男を指差す。
スペードはゆっくりと足を退かした。手でテーブルの土を払い、

深々と頭を下げる。
そして、走った。
「えっ？」ファニーとダウスはスペードを目で追う。スペードは颯爽と出口へと向かっている。目で追っていたのはファニーとダウスだけではなく、店内にいる全員の人間がスペードの行方を目で追っていた。
ファニーとダウスも慌てて頭を下げてスペードの後を追った。

「ふざけんな。お前、あいつらがナンパしていた、って言ったよな。言っていたよな。」スペードが助手席から身を乗り上げファニーの胸倉を掴んで激昂している。瞳孔は開き、顔も真っ赤だ。
「仕方ないだろ。おれにはそう見えたんだ。車への乗せ方とか他人行儀みたいだったし。」ファニーもこうなったら逆切れしかないと思い、声を荒げて応対する。
「ふっざけんな。おれは、初めてだ。あんな・・・あんな・・・あんな人前で恥をかいたんだぞ。」スペードの怒りは鎮まることを知らず、勝手なことを主張する。
「それはお前があんな問い質し方するからだろ。もっと丁寧にできないのかよ。」
「あっちの方があいつらも恥をかいて二度とナンパなんてやらなくなるだろーが。」
「それにしても、派手すぎるんだよ。」
信号が赤になったのか、車が止まった。その衝撃で少しよろける。
「いい加減にしろ。」ダウスがファニーとスペードを引き離す。
「だってこいつが」ファニーがダウスに向かって口を尖らせた。スペードは中々ファニーの服から手を離そうとはしなかった。
しかし、力の差はスペードよりダウスの方があるのでダウスが無理やり手を離させた。
「仲間割れをしている場合じゃないだろ。マコトの命が掛っているんだ。これからは慎重に行くってことでいいだろ。これも経験だ。切り替えて行くぞ。」ダウスが運転席に戻って青信号になったのを確認して運転席に戻る。
「ふん」とスペードは納得した顔はしなかったが助手席に戻って座り込むとシートベルトを掛けた。
時刻は六時を回っていて外は暗かった。すれ違う車は皆ライトを点

けている。
「それで、マコトは何って言っていたんだ。」ダウスが横に座るスペードに訊ねる。
「さあな。」スペードはふて腐れた子供のような答え方をした。
「さあな、って小学生みたいなこと言ってんじゃねーよ。」ダウスが唾を飛ばしてスペードを諭す。
「あれだよ。あれ。ギャル男が耳元に飛ぶ蠅のようにウザいから速く向かえに来てくれってさ。」スペードが面倒くさそうに言う。
「本当にそんなこと言っていたのかよ。ずいぶん余裕だな。」ダウスが信じられなさそうな顔をする。
「ああ、本当だ。やたら棒で突っついてくるってさ。」スペードはぶっきらぼうに言う。
「何だよ、それ？　相当危ないんじゃないか？」ファニーが心配になり口を挟んだ。が、しかし、「お前に言ってねーよ。」スペードが助手席から顔を出して言い放ってきた。
「なんだよ。もう、済んだことに対していつまでもこだわってんじゃねーよ。女々しい奴だな。」ファニーも負けずと言い返す。
「お前が余計な発見したからこうなったんだろ。」
「いや、それをゆうならお前が最終決断くだしたんじゃないか。」
「いーや、お前の見間違いがいけない。」
「違う。お前がアドレスを勝手に変更したことだ。」
「・・・うるせんだよ。お前らは子供か」ファニーとスペードのくだらない口論にイライラしたのかダウスが怒鳴った。
「お前もいけねーんだよ。なに浮気して、女に番号消されてんだよ。」スペードがダウスのことを咎める。
「そうだ。老け顔のくせに浮気なんかしてんじゃねーよ。」ファニーも便乗してダウスをなじる。
「はぁぁあ、なんだよ、それ。・・・おれがいけねぇのかよ」ダウスが信じられない奴らだ、とでも言いたげな顔で大声を出す。
「そうだ。お前が悪い。」「お前がいけない。」「お前のせいだ。」

「老けている癖に調子に乗るな」と責任の擦り付けあいと、悪口の応酬を乗せた車は夜の始まった国道を走り始めた。

推理

「ふっふふ、どうしたの？」マコトは嬉しそうにハンバーグを食べながら笑った。
「いや・・・さっきはありがとう。」幸弘は改めてお礼を言った。
「ふっふふ、いいですって、こうやってさっきから奢ってもらってばっかりなんだから。」マコトはハンバーグを切りながら言う。
「でも、なんだったんだろうな。さっきの。」哲郎が不思議そうにぼやいた。
幸弘達は突然三人組みの男に絡まれた。やり方は間違っていたかもしれないが、倫理的な観点から考えると向こうの意見の方が正しかったかもしれない。中学生を遊びに誘ってナンパしているんじゃねぇ、という言葉が胸に刺さった。あのとき、マコトが嘘を吐いていなかったら、自分達はどうなっていたのだろうか。警察に捕まることはなくても、大恥をかくことになっていただろう。
　だが、あれから幸弘達のレールは注目の的になり、やりにくかった。マコトの調子はあの後も狂うことはなく、最後に三連続のストライクを出して二百を超えたスコアを叩き出したときはゲームセンターにいるお客、店員から惜しみない拍手が送られた。哲郎は百八十とマコトには及ばないものの中々の好成績だったことに対し、幸弘は百十とふがいない成績だった。だから、拍手を送られた時は恥ずかしくて顔から本当に火が付くのではないかと変な心配した。
「しっかし、あいつらは中学校出た時から付いて来たんだろ。暇な奴もいるもんだなぁ。」哲郎は相変わらずの楽観的思考で言う。
「そうですよね～、本当に暇な人がいますよね。私達がこんなに楽しんでいるところで無駄な時間を過ごしている人がいるって可哀そうですよね。」マコトは楽しい、という言葉を強調する。
「だよね～、ほんっとに可哀そう。」哲郎が嬉しそうに目じりを下げる。

「マコトちゃんって普段何しているの？」幸弘が唐突な質問をする。マコトの私生活に興味があった。彼女には何か秘密がありそうで気になって仕方なかった。
「ふっふふ。興味ありますか？」マコトはいたずらな笑顔を見せる。
「ああ、あるよ。」幸弘はマコトの目をじっと見て真剣な顔で答えた。何故か、負けてはいけない、という気持ちが働いた。
「ふっふ、じゃあ、逆に質問します。わたしは普段どんなことをしているように見えますか？」マコトは余裕の笑みを浮かべて妖艶な姿になる。
「はい。」哲郎が手を挙げた。「はい、哲郎さん。」マコトが指を差す。
「マコトちゃんはね、やさしいからお花に水をあげたり、近所に住むおじいちゃんやおばあちゃんの会話の相手になったりしているんじゃないのかな。あとは豆を持って公園に行って、小鳥達に餌やりをしているとか。」哲郎がどこまで本気なのかわからないが、大層嬉しそうな笑顔を浮かべて語った。
「哲郎さん・・・残念。」残念の後にハートマークが入った言い方でマコトは答える。「ちくしょおぉ。」と哲郎が嘆く。テーブルを叩く顔もどこか満足気だった。
「次は・・・幸弘さんの番ですよ。」マコトは妖しく笑う。
「例えば・・・・年上の彼氏がいるとか。」幸弘はマコトの目をから離さず言う。
「ふーん、おもしろい。それで。」
「えっ、嘘。マコトちゃん彼氏いるの？」哲郎は夢から覚めたように目を丸くする。「冗談だろ。」
　幸弘はそれを無視して続ける。
「きっとその彼氏はお金を結構持っている。それなりに社会的地位が高く、奥さんと子供がいる妻子ある身なんだ。」
「へぇ～、幸弘さんは想像力豊かなんですね。」と鼻で笑い「でも、彼氏がいるんだったら、幸弘さん達の誘いにのらないと思いますけ

ど。」とマコトが矛盾点を上げる。
「ああ、普通なら乗らないな。でも、相手は妻子ある身。いくら頑張っても彼は自分の物にはならない。だから、君はおれ達の誘いに乗って気晴らしをしようとした。君の精神年齢の高さは年上の彼氏との付き合いで培ったものだ。」
「・・・意外と鋭いわね幸弘さんは。」
ここで、マコトの表情に曇りが見えた。
「えぇぇ、本当なの？」哲郎は椅子から立ち、幸弘とマコトを交互に見る。
「幸弘さん、半分正解よ。」マコトはぽつりと漏らす。
「半分？」幸弘が眉をひそめる。
「昨日、別れたの。もう・・・会わない方がいいって言われたの。」マコトは力なく答えた。幸弘は哲郎と顔を合わせる。哲郎は唖然としながら椅子に腰を落とした。
ここで少し気まずい時間が流れた。哲郎は依然として言葉を失ったままで、マコトはテーブルに視線を落としていた。まるで、テーブルの先に別れた彼がいるような、悲しい表情だった。そして、幸弘はこの場に適切な言葉が見つからず、なにも言葉を発せなかった。
沈黙を破ったのは哲郎だった。
「マコトちゃん、無理して言わなくてもいいよ。・・・ほら、ハンバーグ冷めちゃうし。冷めたハンバーグなんておいしくないんだから。」気を取り直した哲郎が何故かやつれた表情で変な気遣いを見せた。やつれ具合から、相当ショックだったのだろう、と幸弘は推測する。そして、それだけ哲郎は本気であったのか、と今更に思う。だが、マコトはさらに衝撃の告白を続けた。
「それで、わたし昨日、彼の奥さんのタンスにいれてやったの。」
「えっ？　何を？」哲郎が意表を突かれたように訊ねる。
「制服を入れたの。彼の子はまだ小さいから制服なんてないし、奥さんにばれれば彼が自分のものになると思ったの。」
「そう・・・だからジャージを。」幸弘は不可解な謎が解けた気持

ち良さと、誰も救われない悲しい物語を聞いたやりきれない気持になった。
また、自分の推理力の高さには自分でも驚いていた。半分当てずっぽうとは言え驚きである。将来は探偵か刑事にでもなったほうがいいのでは、と真剣に考えるほどだった。
「だから、幸弘さんの言うように・・・気晴らしを・・・ごめん・・・さい」マコトは泣きそうな表情で謝り始めた。女の子が泣くと面倒くさいとたまに聞くが、女の子の悲しい表情を実際に目の当りにすると面倒よりもやりきれない気持ちになった。
「・・・マコトちゃん・・・辛かったんだね。」哲郎はマコトに貰い泣きしそうになっている。
「いや、いいんだよ。おれ達も楽しかったんだし。」幸弘も哲郎に負けずと慰める。
が、しかし。
「・・・ふっふ。」とマコトの体が揺れ始めた。
「ってそんなはずないでしょ。どこに金持ちの愛人になる中学生がいるの。」マコトは顔を上げて笑い声を挙げた。
「・・・嘘なの。」哲郎が半水と少しの涙を流して目を丸くさせる。
「・・・えっ？　制服は？」幸弘も同様に目を丸くした。
「嘘ですよ。だから、掃除の時間に水で濡れたの。正確に言うとドジな男子に濡らされたの。あっ、でもわたしはドジッ娘ではないですよ、哲郎さん。あと、天然っていうのも冗談ですから。」マコトはきっぱりと言った。
「・・・じゃあ、普段は何をしているの？」幸弘は目を丸くしたまま言った。自分でも感心するほど、素直な訊きかただった。
「普通の女子中学生ですよ。勉強して、家事の手伝いして、あと、わたし両親がいないから祖父と祖母と三人暮らしなんですよ。だから、どちらかと言うと、哲郎さんの方が正解に近かったですね。」
「あっ、・・・よっしゃあ。」と哲郎は少し反応が遅れてガッツポーズを決めた。

幸弘は疑う。マコトは本当に自分よりも年下なのだろか、と。目の前の女子中学生を見て、真剣に考えていた。

追跡者・山口　3

山口は腕が痛くなってきていた。ダーツのやり過ぎだ。あれこれ一時間は投げただろう。ようやく、四百点の大台の乗ったのだ。自分にはダーツの才能があるのではないだろうかと密かに考えた。これを趣味にするのも悪くない。しかし、彼らに動きがあった。奈津美が無理やり連れていかれたのだ。

「ねぇ、もう少しビリヤードやろうよ。」奈津美がギャル男に向かって言った。

「もういいよ、ビリヤードは」とうんざりした顔でギャル男の一人が答える。

「ビリヤード一時間もやったし、飽きたし。それより、他にどこか行こうぜ。」別のギャル男が言う。

「え～、わたしはまだここでいいよ。」奈津美はやんわり拒否する。

「いいから、奢るからいいじゃん。」三人目のギャル男が奈津美の手を無理やり取ってドアへの外へと連れて行った。その際に奈津美と目が合った。彼女の目は『助けて』と訴えていた。

山口は彼らの後に追って会計を済ませる。外に出て階段を降りる。彼らは車の中で相談でもしているのか、少し間をおいてから走り出した。山口も急いで車に乗ってエンジンを掛けた。

彼らの車はいまどきの若者を象徴するように乱暴な運転だった。見失わない様に追うのは至難の業である。ちょっと、気を抜くと彼らは信号無視をして、先に行ってしまうからあとを追う山口も必然的に信号無視をする必要があった。

彼の車は一時間近くも走り続けると彼らの車に変化が起こった。彼らの車は人通りの少ない道へと走りだした。一体どこを目的地にして進んでいるのだろうかと悩みながらも、諦めず彼らを追った。

孫子の兵法に『戦いの勝とうと思うなら、まず相手のことを知らなくてはならない。相手を研究し、自分の得意・不得意についてよ

く理解すれば、どんな戦いにも勝つことができる』と解されている。
今日、山口は奈津美を見て自分の敵だと判断した。ならば、まず孫子の兵法通り、奈津美を知らなければならなかった。だから、こんな時間まで奈津美の乗る車を追い掛けてここまで来た。しかし、彼女は何をしたいのかが全くわからなかった。
山口は車を止めた。
山口の車はこれ以上進むことができなかった。彼らの車は林の方へと進んで行ってしまったのだ。
山口は彼らが戻ってくるのを待った。五分、十分と待った。しかし、これ以上待っても無駄な様な気がした。林の奥へと進んだ車で、恐らく奈津美は襲われていることが想像できた。
そのとき、敵に塩を送る、という言葉が思い浮かんだ。
上杉謙信は、塩不足に悩む宿敵武田信玄に武田領民の苦しみを見過ごすことができず、塩を送って助けたらしい。苦境にある敵の奈津美を助けるのは自分しかいない。それに、漫画喫茶でダーツの操作がわからないという苦境の自分を救ってくれたのは奈津美であった。
山口は車を降りて林の奥へと足を進めた。林の中は真っ暗で気味が悪い。足元を照らすライトもないので、足元も見えず、不安定だった。
林に入って三分も経たない内に奈津美の乗る車は発見できた。ここからは態勢を低くして車に近づく。車まで辿り着く前に奈津美らしき声が聞こえた。「やめて」と必死の懇願が聞こえる。山口は地面を蹴って来た道を戻った。

手遅れ

責任の押し付け合いと悪口の応酬する車は目的地へと辿り着いた。三人は勢いよく車をおりると階段を駆け上がり店内に入る。彼らは焦っていた。マコトの携帯はもう既に繋がらなくなっていた。

「すいません、あの・・・ギャル男みたいな派手な三人とジャージを着た女のグループはいませんか？」店内に入ってそうそうにダウスが白くて細い男性店員に訊ねた。

「えっ？　・・・」急に訊ねられた白くて細い男性店員は頭の上に『？』マークを浮かべる。

「ああ、もういい。自分で探す。」スペードはそう言うと後ろにあった扉を開けてビリヤード場へと入って行った。

「あっ、ちょっと？」白くて細い男性店員が慌てて手を前に出して言う。

「四人組みの男女です。ビリヤードをやっていたと思うんですけど。さっきまでいたと思うんです。」ダウスがもう一度訊ねた。

「そんなことを言われても。」白くて細い男性店員は弱った声を出した。

すると、「あの～・・・」と漫画を整理していたメガネを掛けた坊主頭の店員が横から口を挟んだ。

「その人達なら一時間前ぐらいに会計を済ませて出て行きましたよ。」

「えっ、一時間前に？」ファニー顔をしかめた。一時間前も経っていると捜索がまた困難になる。

「何か様子がおかしいところありませんでした？」ダウスが訊ねる。

「えーと、自分が会計を担当したんですけど、女の人は手を引っ張られる感じで外に出ていって、会計は一人でしたね。おかしいといえば、まぁ、おかしかったですかね。」メガネの店員は思い出す様に顎を触りながら言った。

「そうですか。ありがとう。」ダウスがお礼を言うと「あの・・・なにかあったんですか？」とメガネ店員が訊ねて来た。
ファニーとダウスは少し間を空けてから「いや～、中学生の妹が家出をしてしまって」と頭を掻きながらダウスが答えた。
メガネの店員は「そう・・・ですか～、それはたいへんですね。」と顔をしかめて「早く見つかるといいですね。最近は物騒ですから」と心配そうに言った。
そのとき、ビリヤード場のドアが勢いよく開き「おい、たいへんだ。」とスペードが大声で叫んだ。

対面　2

ハンバーグ店を出て車に乗ると「ねぇ、いいところ知っているんですけど、行ってみませんか？」と、提案してきた。
「いや、でも、そろそろ帰らないと、家のお爺さんとお婆さんが心配するんじゃない？」
哲郎が心配そうに言う。時刻は十九時を過ぎていた。
「大丈夫です。携帯で連絡入れておきましたから。」シンカイマコトは携帯電話を見せる。
「う～ん、そっか、せっかくだから行ってみようか。道はわかるの？」幸弘が運転席からマコトに訊ねる。
「えっと、取り敢えずわたしの中学校の近くまで行ってくれれば、あとは案内できます。」
「了解。」幸弘はギアをドライブに入れ替えて出発した。
マコトは車を三十分走らせたところから、道がわかったようで道案内を始めた。
マコトのいいところ、というのは中学校で流行っている心霊スポットらしい。
「廃病院なんですよ。未だに、メスとかが手術室に置いてあるんです。」後ろからマコトが嬉しそうに心霊話をする。
「うわぁぁ、嫌だね～、出るのはそこで死んだ患者達かなぁ。」哲郎は言葉とは裏腹に嬉しそうである。
「幽霊なんて、どうせいねぇよ。」幸弘は二人のテンションを下げるように言う。
「あ～、やだ、やだ。これから、心霊スポットに行くのにどうしてそうゆうことを言うの。もしかして・・・怖いの？」後ろから挑発的な声がする。
「ばっか。幽霊なんて信じてないって言ってんだろ。」
「ふーん、あっそう。後悔しても知らないですから。」

「えっ？　どうゆう意味？」哲郎が嬉しそうに訊ねる。
「それは内緒です。」口に人差し指を口当てるマコトがバックミラー越しに見えた。

「なぁ～、随分暗い道になってきたけど、大丈夫なの？」ハンドルを握りながら幸弘が訊ねる。
「大丈夫だからそのまま進んで。」後ろから小さくマコトの声が聞こえる。
「本当に大丈夫なの？」
「・・・」
「ねぇ、マコトちゃん。大丈夫なの？」
「・・・」マコトからの応答はない。
「マコトちゃん？」幸弘はバックミラーでマコトを確認する姿が見えない。
「・・・えっ？　おい、いまなんかいたぞ。」横にいる哲郎が叫んだ。
　幸弘は急いでブレーキを踏んだ。ギアをパーキングに戻す。
「おい、なにがいたんだよ。つーか、マコトちゃんは？」幸弘が哲郎を問い質す。
「しらねーよ。それよりなんかいたって、いま。」哲郎が幸弘の体を叩く。
「いてぇよ。それよりマコトちゃんはどうした。」幸弘が哲郎に訊く。
「知るかぁ、おれが。」哲郎は高い声を出した。
　幸弘の心臓の鼓動が速くなる。マコトが消えた。彼女は幽霊だったのではないかと頭に過った。
「マコ・・・」マコトを探そうと身を後ろに投げ出して探そうとしたら『わぁぁぁぁ』とマコトが下から現れた。「ぎゃぁぁっぁぁぁ」と悲鳴を上げ、勢いよく後ろに身を引く。ハンドルに背中を強打した。その衝撃で『プッ』とクラクションが短く鳴った。

さらに頭に鈍い痛みが走る。「ぎゃぁぁぁぁぁ」哲郎の頭が横から飛んできたのだ。「ドン」幸弘と哲郎の頭がぶつかったのだ。
「痛えよ。」と哲郎に文句を言おうとしたら女の幽霊が助手席の窓を叩いていた。
「・・・ぎゃぁぁぁぁぁ」幸弘が悲鳴を挙げる。「えっ？　どうしたの？」マコトが二人に訊ねてきた。
幸弘が悲鳴を上げ、目を見開いたまま、指で助手席の窓を差した。そこを見た、マコトも幽霊の存在に気付き悲鳴を挙げた。

追跡者・山口　4

山口を見て、車に乗る男女が悲鳴を挙げた。自分はそんなに恐ろしい顔をしているかとショックを受けながらも、山口は窓を叩いて自分が怪しい人物ではないことを証明しようとした。「ドン、ドン」助手席に座る男はさらに悲鳴を挙げた。ドアを開けようとも心見たが鍵が掛っている。すると、運転席に座る男がギアに手を掛けた。

山口は急いで後部座席のドアに手をかけた。こちらは鍵がかかっておらずドアが開いたので一気に乗り込んだ。

「きゃぁぁぁ。」後部座席の可愛い女の子が高い声で悲鳴を挙げて泣いた。

「まってください。わたしは生きています。」何故そこから説明しなくてはいけないかと、悲しくなる。

三人の男女は「へっ？」ときょとん、としてまじまじと山口を見る。

「生きているんですか？」運転席に座る男が随分とストレートな質問をしてきた。

「生きている人間です。それより、力を貸して下さい。助けたい人がいるんです。」山口は精一杯の誠意の気持ちでお願いする。

「それも、生きている人間ですよね。元人間とかは駄目ですよ。」助手席に座る男が心配そうに言う。

「大丈夫です。生きている人間です。」この人達では頼りないな、と思いつつも猫の手も借りたい気持ちなので「急いで車を降りて下さい。人が襲われているんです。」と説明する。

「そんな都合の良いこと言って地獄にでも連れて行くんじゃないだろうな。」運転席に座る男が訝しがる目で山口を睨む。

「そうだ。おれ達はそう簡単に騙されないぞ。」助手席に座る男も続けて言った。

「だからわたしは生きている人間です。女性が男達に襲われている

んですよ。」山口は少し荒々しく言った。
すると運転席に座る男が「マジですか？」と目を見開き「道案内をお願いします。」と急に真面目な顔になった。
助手席の男もドアを開いて、外に出る。
運転席に座っていた男は後に座る女の子に「十分経ってもおれ達が戻って来なかったら警察を呼んで」と言伝をして、助手席からビニール袋を取り出した。助手席の男は律儀に準備体操をしている。
「なにをしているんですか？」山口は準備体操をしている坊主頭の男に訊いた。
男は山口の予想通り「準備体操です。」と答え「では、行きましょう。」と勇ましい声で言った。

ギャル男達の車まで再び着くと「あれですね。」と運転席に座っていた方の男が軽やかな口調で言った。
「あとは、おれ達にまかせろ。」坊主頭が勇ましい口調で言うと山口を手で遮る。
しかし、「おい。でもどうやって侵入するんだ？」と坊主頭が早速テンパっている。二人の男から勇ましさのようなものは感じるが、どこか頼りなかった。山口は少し後悔する。何故、自分は警察を呼ばなかったのだろうか。混乱して、走っていた車に助けを求めたことを後悔し始めていた。
「大丈夫。これでガラスは簡単に割れるって昔、テレビでみたことがある。」運転席に座っていた男が小銭の入った袋を、じゃら、じゃら、と鳴らした。どうやら、小銭の入ったビニール袋で窓を割って車内に侵入するらしい。
「行くぞ。」二人の男は軽いフットワークで走り始めると窓ガラスを軽快に割った。その隙間から、手をのばして鍵を開けた。ギャル男達が何か叫ぶのが聞こえた。しかし、男達はギャル男達を車の外に引きずり出すと身軽に体を使い、殴って、蹴って、と飛びまわる

ようにギャル男達を痛めつけた。そして、あっという間にギャル男達は気を失った。
あっけなく幕は閉じた。
そして、男達は手を叩いて言った。
「おれ達、こう見えても高校時代名門の空手部でインターハイに出場したんですよ。」
二人の男は満足げな笑みを浮かべた。

奇跡の対面

「おい、たいへんだ。犯人が捕まったらしいぞ。」スペードが大声で叫んだ。
「・・・なにがたいへんなんだ。朗報じゃないか。」ダウスが大らかな声で言った。
「それが犯人はボコボコされたらしいんだ。」スペードが困惑を浮かべて言った。
「えっ？　なんの犯人が捕まったんですか？」ダウスの隣にいたメガネの店員が訊いてきた。
「えっと・・・どうやら朝シュークリームを勝手食べた奴が捕まったらしいんですよ。」ダウスがまた出鱈目な嘘を吐いた。
「シュークリームでぼこぼこですか」メガネの店員は目を大きくさせて「はぁー、本当に最近は物騒だな～」と世界に対して嘆いた。
「それで、マコトはどこにいるんだ。」ファニーがスペードに訊いた。
「なんか、幽霊の出る廃病院の近くらしい、誰か場所分かるか？」スペードが首を傾げる。
「おれ、知っているけど・・・あそこはマジでヤバいぞ。」ダウスが眉をひそめて言った。
「なんだよ。ダウスその体で幽霊が怖いのかよ。」スペードは馬鹿にしたように言う。
「情けねーな。」ファニーも口を緩めた。
「おまえらもいけば分かる。あそこはマジで怖いから。」ダウスは、覚悟しておけよ、と言って漫画喫茶を後にした。
しかし、この後に彼らを待っていたのは幽霊よりも会いたくない人物だった。スペードは三人組みとの再会にバツが悪そうにする。
　そして、何故かファニーのバイト仲間のトミーがいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8321u/

誰かが誰かを救う陳腐な物語

2011年7月21日17時00分発行